

この五千人の供食の物語は四つの福音書全てが記している、ただ一つの奇跡物語です。著者はマルコによる福音書の物語を再録したと考えるよりも、同じ出来事を題材にした異なった伝承を用いているものと考えられています。この奇跡物語は旧約聖書列王記下 4:42～44 のエリシャが百人の人たちに食べさせる奇跡の話に由来した、ユダヤ教の影響のもとに成立した伝承であると考えられます。3～4節はこの福音書の特徴ある言葉です。この福音書においては、いろいろな出来事がユダヤ教の暦を場として記されています。ここでも、過越祭で祝われる出エジプトの出来事と、イエスがパンを分け与えるという出来事とを関係づけて見るような設定され、命のパンを与えるという事柄を、イエスが十字架上で裂かれる体と流される血のゆえに人間の根源的な罪が赦されるというモチーフと関連づけて読者に読ませようとしています。5節の「どこでパンを買えばよいだろうか」という問いは、どこからパンを得ることができるかということです。「どこから、どこへ」というのはこの福音書の特徴的なキリスト論の問いです。これに対する答えは、「わたしは天から降って来たパンである」(6:48)、「わたしは命のパンである」(6:48)です。そしてそれはイエスの十字架上で死、根源的な罪の贖いによって人々に永遠の命を与えるという事柄です。この時イエスが人々に与えたパンは、イエスが与える永遠の命、イエス自身をも示しているということです。共観福音書に記されている「飼い主のいない羊のような有様を深く憐れんだ」という言葉はありません。共観福音書では、イエスは裂いたパンを弟子たちに渡し、弟子たちが人々に配ったことになっていますが、この福音書ではイエスが直接手渡します。「パンを取り、感謝の祈りを唱えて」や「座っている」(直訳は「横になっている」。この動詞は当時の食事の時の姿勢を示す)用法から、11節が最後の晩餐の伝承を用いていることをうかがわせます。特に、この福音書においては、最後の晩餐の時に聖餐の制定の場面がなく、この五千人の供食の出来事が聖餐を示していると思われるのです。このように考えますと、「五つのパン」は、五千人の空腹を満たすというよりも、むしろ精神的要求を「命のパン」として満たした、ということになると思われるのです。この場合、「パン」は「キリストの体」の象徴となります。五千人の供食の奇跡は、更に最後の晩餐そして聖餐へと繋がっていく、一繋がりの神さまの救いの御業なのです。イエスはイエスと共に生きる新しい命の道を与えたのです。